都道府県名	山　梨　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	韮崎市立甘利小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	4	3	4	2	２５	３４
児童数	142	124	122	121	119	127	4	759	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

意欲を持ち，主体的に学習に取り組む子どもの育成
～一人ひとりが学ぶ楽しさを実感できる学習指導の工夫と改善～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・全学年・算数
　理解や習熟の程度に差が生じやすい教科であるため。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度

○　テーマ
　意欲を持ち，主体的に学習に取り組む子どもの育成
　　～個に応じた指導の工夫と改善～

○　研究の見通し（仮説）
　仮説を設定しない研究方法を採用した。理由は，次の「研究内容・方法」で述べる。

○　研究内容・方法
①研究内容
昨年度の「総合的な学習の時間」と生活科の研究を継続・発展させるとともに，「総合的な学習の時間」と各教科の関連の重要性を確認した上で研究を進めることとした。「基礎・基本」の学習の発展は，自然と総合的学習の性格を帯びてくる。「総合的な学習の時間」において，各教科で獲得した基礎・基本を使うことによりよりよく課題を解決することができるとともに，基礎・基本が日常生活で生きて働く力となる。逆に，「総合的な学習の時間」での学びが，各教科の学習に生きて働くことになるのである。以上の考えから，各教科における研究と「総合的な学習の時間」における研究を並行させて進めることとした。

(1)フロンティアスクールに関する内容（算数科）
・個に応じた指導のための指導法・指導体制の工夫と改善
・子どもたちの学力の評価を生かした指導方法の改善
・個に応じた指導のための教材の開発
　※フロンティアスクールとしての取り組みは，今年度が一年次であるため，理論研究が中心。

(2)「総合的な学習の時間」・生活科に関する内容
・主体的な学習となるための「課題・ゴール」の設定のさせ方に関する研究（総）
・主体的な学習となるための，「甘利っ子タイム」学び方ハンドブック作り（総）
・自己評価カードの作成（総・生）
・子どもの興味・関心，課題などを考慮した，グループ別の学習活動の設定（生，総）

②研究方法
「総合的な学習の時間」の研究は，３年次である。今までの研究・実践か

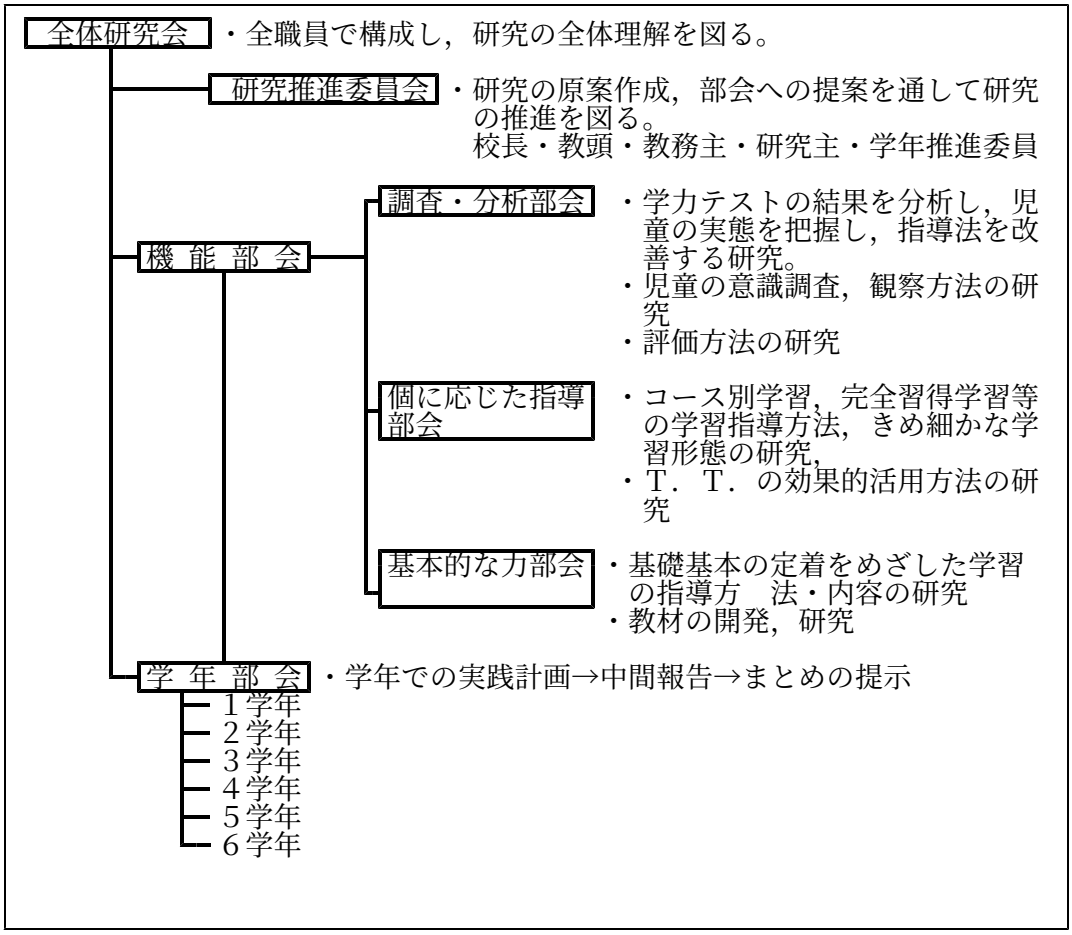
	ら，課題設定の仕方や子どもたちがより主体的に学習するための手だて等，ある程度実践上の課題も明らかになってきた。それに加えて，本年度から「フロンティアスクール」の研究校として，個に応じた指導等の研究にも取り組む必要が生じた。そこで，投入因子を絞って，それについての有効性を検証するという方法は採用しにくい。以上のような理由から，昨年度の研究を継続発展させた内容については仮説検証型に近い研究方法を取りながらも，全体の流れとしては「事実に関するデータを収集し，分析・解釈する」という研究方法を取り入れた。

平成15年度	○　テーマ 意欲を持ち，主体的に学習に取り組む子どもの育成 ～一人一人が学ぶ楽しさを実感できる学習指導の工夫と改善～ ○　研究の見通し（仮説） 基礎基本の徹底，学習形態・個に応じた指導法の工夫と改善を図れば，一人一人が学ぶ喜びと楽しさを実感し，確かな学力が身についた子どもが育つであろう。 ＊仮説を検証する形で研究を進める方が研究の目的が明確になり，本校の目指す児童像により近づけることができると考えた。 ○　研究の内容・方法 昨年度の成果より，算数科においては全学年がコース別学習，マスタリー・ラーニング・モデル（完全習得モデル）のどちらかを実践することで，子どもたち一人一人に徐々に学力が身に付いていったことが明らかになった。また，子どもたちの意識調査からも，わかる授業，楽しく学べる授業であったということが分かった。また，昨年度の課題として，いくつかのコースやグループに分けて指導する場合に生じる学習場所確保の問題，算数科で行ってきたティームティーチングの在り方を研究する必要性。本質的な学力・確かな学力を客観的に測定し，最適な指導と評価を並行して考えることなどを研究していく必要性があることが分かった。 これらの結果から，本年度は，「児童の実態を明らかにする」「甘利小学校としての『個に応じた指導方法・学習形態』を確立する」『少人数での学習が可能となるような指導体制を考えていく」ことを目指すことにした。 「フロンティアスクール」の研究は，２年次である。昨年度は仮説を設定しなかったため，本年度は，「基礎基本の徹底，学習形態・個に応じた指導法の工夫と改善を図れば，一人一人が学ぶ喜びと楽しさを実感し，確かな学力が身についた子どもが育つであろう」という仮説を設定した。 研究内容として ①基礎的・基本的知識や技能の習得をめざした指導法の工夫と教材の開発 ②個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫と改善 ③子どもたちの学力や意識の実態の調査・分析，評価の研究 を，三つの柱として考えた。そして，この三つの柱を具現化するために「基本的な力部会」「個に応じた指導部会」「調査・分析部会」という三つの機能部会を作り，各部会で連携を図りながら研究を進めた。具体的には， ①基礎的・基本的知識や技能の習得をめざした指導法の工夫と教材の開発 学力は，「読み・書き・計算」の習熟によって基礎基本の土台が作られると考える。その土台をどう作り上げていくか研究していく必要がある。 そこで，「基礎的・基本的知識や技能」を習得させるために，全校が一斉に取り組んで成果をあげられるような指導内容や方法を研究した。また，それに伴って使用するプリント等の作成や教材開発を行った。 ②個に応じた指導のための指導方法・学習形態の工夫と改善 子どもたちに一番大切なものは，一人ひとりの子どもに学力を身につけさせることである。そのために，子どもたち一人一人に課題を持たせ，子どもたちの学習スタイルにあった学習方法を見つけ出す研究を進めた。 本年度の研究は，算数に絞った授業研究を行い，授業実践の中で，昨年度の成果でもある『コース別学習，完全習得学習等の学習形態』『きめ細かな指導の学習形態』を効果的に取り入れた。 ③子どもたちの学力や意識の実態の調査・分析，評価の研究 昨年度，国語と算数の学力テストを全学年で行い，本校児童の学力が全国的に見てどの程度であるか，算数と国語においてどんな領域の力がついていて，どんな領域の力が足りないのか等を，実施したＣＲＴ学力テストを使って分析した。 また，教師による児童の観察・学習に対する児童の意識調査を行い，児

	童の実態を分析・把握した。それをもとに，今後どのような指導をしていったら良いかを研究した。 以上３点を，本年度重点的に取り組み，研究途上の成果等も検証しながら，子どもたちに「確かな学力」を育むための研究を行ってきた。 ＊昨年度行っていた「総合的な学習の時間」の研究は，３年間でまとめを行ったため，本年度は学力向上に関わる研究を行った。

平成16年度	○　テーマ 意欲を持ち，主体的に学習に取り組む子どもの育成 ～一人一人が学ぶ楽しさを実感できる学習指導の工夫と改善～ ○　研究の見通し（仮説） 基礎基本の徹底，学習形態・個に応じた指導法の工夫と改善を図れば，一人ひとりが学ぶ喜びと楽しさを実感し，確かな学力が身についた子どもが育つであろう。 ○　研究の内容・方法 ・一年次，二年次の研究をもとにした実践中心の研究。

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

１．CRT の結果を分析する中で見えてきた本校の実態について

平成１４年度（２月）に全校児童に CRT を行った。１～５年までは国語と算数，６学年は国語・算数・社会・理科である。

①昨年度末 CRT の結果から国語の言語事項，算数の数と計算の領域について２年生以上の分布を調べてみた。低学年では，分布は右よりにこぶがあるようになっている。しかし，４年生からその分布は，２つのこぶのあるものになっている。クラスによっては，その傾向が大きく見られるものがある。

②国語，算数の２教科を見ても，全体的に，全国平均よりも下回っている。

③５年生が，全国平均に近い値を出している。

以下に学年ごとの分析をまとめる。

教科／学年	国　　語	算　　数
１学年	未実施	未実施
２学年	全体的に全国平均を下回る。特に「書くこと（効果的に書く・書く事柄を集め選ぶ）」の領域が大きく（６％）下回っている。	全体的に全国平均を下回る。特に「数と計算（たし算とひき算→－７．６％）」「図形（ものの形，ものの位置→－５．９％）」の得点率が低い。」
３学年	全国的に全国平均とほぼ同レベルだが，「読むこと」の領域は上回り，「言語事項」の文の決まりや語の意味，カタカナの用法の理解については，やや下回っている。	「量と測定」の領域はほぼ全国平均並みだが，「図形」と「数と計算」のたし算とひき算，かけ算の項目が全国より下回っている。
４学年	全体的に全国平均とほぼ同じぐらいである。（得点率の差－１．７５％）全国平均を上回っているのは，書くこと（相手や目的に応じて適切に書くこと＋３．８％）であり，低いのは，話すこと聞くこと（伝えたい事柄を選んで話すこと－３．４％），読むこと（文章の特徴に注意して読むこと－３．２％）言語事項（言葉の性質や役割を知ること－４％）である。	全体的に全国平均よりも低い。（得点率）－２．９５％）特に低いのは，数と計算の領域である。（－５．３％）。また，量と測定（時刻と時間－４．４％）も低い。全国平均にほぼ達しているのは，量と測定（長さ・かさ・重さ－０．２％），図形（箱の形・長方形・直角三角形－１．２％）である。
５学年	国語については，領域別で全て全国を上回っている。小領域でみても，辞書の使い方，ローマ字以外は全て全国より上である。特に，漢字については，全国より１０％近く上回り，日々の積み重ねの成果であると思われる。	算数についても，全て全国より上回っている。「読み，書き，計算」は個人差はあるが，かなり定着していると思われる。
６学年	語句の正しい使い方や漢字を正しく使うことについて，全国に比べ大幅に劣っている。	算数については全国的に劣るが，特に小数や分数の計算，計算の決まり，グラフに表す表し方についてが，大幅に劣っている。

④　　に示したように，算数に於いてほとんどの学年に共通して「数と計算」の領域が落ち込んでいる。

⑤国語では，書く・読む・話す・言語事項とそれぞれに於いて下回っている。

この結果から，本校では算数における「数と計算」領域に取り組む必要性が見える。

２．本校の評価について

（１）評価の方法

①評価方法の決定

個に応じた指導に際して，子ども一人一人の指導目標の達成状況を正しく見極めることが必要である。個を生かす学習においては評価の役割が重要になってくる。

その評価に当たって，

ｉ：指導目標を明らかにする。
何ができるようになるかを明確にし，教師の目から見てどのような行動ができた時にその目標が達成できたか明らかにしておく。

ii：子どもが，その授業を受ける前に，その目標をどの程度達成しているかを評価する。

iii：子どもの学習の特徴（適性，学習スタイル，認知型など）を評価する。

iv：与えられた教材に対して子どもがどんな反応をしたかを調べ，目標に近づいているかどうか，その達成状況を評価する。

②

診断的評価　　CRT による児童の実態把握

↓

形成的評価

基礎基本部会の提案に対する実践と授業内容の理解度の相関度

〇計算力の習熟の度合いで授業内容の理解度に変化が見られるか？

〇計算力の習熟から児童の意欲に変化が見られるか？

☆学習前と学習後では，（学習感想から）児童の情意面に変化が見られるか？

☆学習感想を書くことで授業に対する客観的な自己評価ができたか？

※授業感想をもとに教師が指導方法に工夫を講じることができたか？

↓

総括的評価　　CRT による児童の実態把握＝この一年でどの程度児童の学力が向上したか？

見える学力：わかる・覚える・できる ── **教師による評価**

見えない学力：興味・関心・意欲，思考力・判断力 ― **児童の自己評価**

③教師による評価

ｉ：学習内容をどの程度理解できたか。
このことについてのデータとしてテストの結果を集計しておく。
単元の学習が終了した時点で，ｉ知識・理解　ii技能　iii数学的な思考の領域ごとの集計を各学年２学級以上のデータをとっておく。

ii：コース別で学習した単元とそうでない単元との相違が見られるか，考察する資料とする。

④児童の自己評価

ｉ：ねらい：自分もやれば，できるじゃん！！という学習の効力感を持てるように自己評価する観点・方法などを子ども達に把握させる。

ii：学習感想で自己評価をする。
算数の教科書に載っている「学習感想」を一年間取り入れて，児童が自分の目や心で自分の学習内容を理解する過程を客観的に測ることができるようにしたい。ただ単に，得点という数値で学習の習得度をみるのではなく，学習過程での思考の流れや理解の深さでつかめるようになることを目指している。

参考文献　「自己評価活動が学校を変える」明治図書

（２）**情意面の調査**

①６月に全校児童を対象とした情意面の調査を行った。算数と国語に対する児童の興味・関心度を知ることを目的としている。児童の算数と国語に対する興

味関心を知ることで，その教科に対する児童の学習意欲（見えない学力）と学習内容の理解度の相関性を探ることができないかと考えている。

②調査項目

ｉ低学年（１・２年）

全部の教科の中でどの教科が好きですか。

算数は好きですか。　すき　少しすき　少し嫌い　嫌い

国語は好きですか。　すき　少しすき　少し嫌い　嫌い

読書はすきですか。　すき　少しすき　少し嫌い　嫌い

ⅱ高学年（３年から６年）

全部の教科の中でどの教科が好きですか。

算数は好きですか。　すき　少しすき　少し嫌い　嫌い

算数の勉強の中でどんな勉強が好きですか。

国語は好きですか。　すき　少しすき　少し嫌い　嫌い

国語の勉強の中でどんな勉強が好きですか。

読書は好きですか。　すき　少しすき　少し嫌い　嫌い

③集計の結果

算数

	すき	すこしすき	すこしきらい	きらい
１年	８６（６４％）	２７（２０％）	９（７％）	１２（９％）
２年	６６（５５％）	２４（２０％）	１７（１４％）	１３（１１％）
３年	５７（４６％）	４３（３５％）	１８（１５％）	５（４％）
４年	５５（４５％）	５４（４４％）	１０（８％）	３（２％）
５年	３７（３２％）	４４（３８％）	２２（１９％）	１３（１１％）
６年	２２（１７％）	４０（３２％）	４４（３５％）	１８（１４％）

この調査から

２年：計算ができたり，問題が解けるようになることで「できる」ようになることで好きと答える子が多い。

３年：算数が好きだと答えている子は，学習内容がよくわかり楽しさを感じている子が多い。反対に，嫌いと感じる子は，計算や九九がまだ十分習得されていないため，できる楽しさや喜びを感じることができない。

４年：全体的に算数が好きという子が多い。しかし，深く考えることは苦手という子が多い。計算がすき。おもしろいから。だんだんできるようになるから。

５年：算数の好き嫌いを分けるのは，計算ができる・できないということで決定される感がする。計算ができる→楽しい→すき

６年：計算ができないことが嫌いの理由になっている子が多い。

☆１年生では，８４％の児童が算数を好きと答えているが，学年が進むにつれて算数を好きと答える児童は，減っている。２年７５％　３年８１％４年８９％５年７０％６年４９％である。特に６年生は，算数を好きと答える児童が少なく，得点率との相関もあるように感じる。

国語

	すき	すこしすき	すこしきらい	きらい	無解答
１年	８４（６３％）	１８（１３％）	９（７％）	１６（１２％）	7(5%)
２年	６３（５３％）	２８（２３％）	１３（１１％）	１６（１３％）	
３年	４０（３３％）	４４（３６％）	２５（２０％）	１４（１１％）	
４年	４６（３８％）	４４（３６％）	２１（１７％）	１１（９％）	
５年	２６（２２％）	４５（３９％）	３９（３４％）	６（５％）	
６年	１６（１３％）	５２（４３％）	３４（２８％）	１９（１５％）	

この調査から

３年：算数に比べて，少し嫌い・嫌いの割合が高くなっている。音読・読解・作文・漢字などの基本的な力のついていない児童は苦手意識が強い。

４年：読書はすきだが，感じが苦手で国語を好きになれない子が多い。

５年：文を読むことが好きならば，国語が好きになるが，読むことが嫌いだと国語が嫌いになる傾向がある。

☆国語については，どの学年も平均して７０～８０％の児童が好きと答えているが，高学年になると，その数は減ってきている。

（３）情意面の調査結果からの考察

○子ども達が，学習を好きと答えるには，「できる」ということが重要な要素になっている。

○教科全体の理解度というよりも，計算や漢字・音読といった子ども達が，実感

できることが好き嫌いを決定することが多い。
○算数と国語を比較して見ると，国語は，どの学年を通しても「好き」と答えている児童の割合は，ほとんど変わらないが，算数は，学年が進むにつれて「きらい」になる児童が増えている。積み重ねを必要とする教科であるので，難しい・できないと言う理由で嫌いになる児童が増えていると考えられる。小学校でこれだけ算数嫌いが増える傾向にあると，中学校，高校になるとさらに数学嫌いの生徒が増えることが予想される。
○算数の学習内容をよりよく理解するためには，教科に対する関心を高めたり，好きになるような工夫が必要ではないだろうか。
○国語は，大切な教科であるが，本校の児童の実態から見ると，算数嫌いになる児童をなくすために学習指導の工夫が必要である。

（４）２月実施の情意面の調査に付け加える項目について
６月実施の調査項目を検討した結果，文科省で行っている「教育課程実施状況」調査にある児童の情意面の調査項目を付け加えることにした。来年度に向けて，児童の変容を見たり，全国の児童との比較をしたりする中で，本校の児童の実態をつかむことができるのではないかと考える。

３．本校における学習感想の活用について

本校では教師による児童の観察・学習に対する児童の意識調査を行い，児童の実態を分析する。それをもとに，今後どのような指導をしていくべきかの研究を進めていく。　その一つの手法として「学習感想」を用いた。

学習感想
学習感想は，本来児童の主体性を高めるための自己評価として考えられたものであるが，指導者の側からは，テストや日々の授業の中では評価しにくい情意的な　面や思考力・判断力にかかわる評価の有効なデータを得ることができるものである。

↓

児童の情意面や思考力・判断力を探ることから，児童の学ぶ楽しさ・理解することの充実感を見いだしたい。

（１）　本校の学習感想　確認事項

①学習感想は，算数の授業終了後書く。
②毎時間行うことで児童の実態や変容をつかむことを目的とするが，学習内容や学年の実態に応じてその回数を減らしても良い。
③授業で使うノートに記入する方法，カードのように教師が用意した用紙に記入する方法どちらでも良い。
④本校の研究仮説に基づいて，次の二つの項目は入れる。
○学習内容がわかったか。
○授業は楽しかったか。
この２つの項目について，学習形態を工夫した単元の集計をとる。（１学年２クラス。１時間ごとの変容や小単元ごとでの変容を探る。その時間の学習内容や学習方法で，児童が楽しさや理解度をどのようにとらえるかは大きく異なってくると思われる。そのため，ただ単に数値でそれぞれの時間の比較をすることは，意味のないことになる可能性も出てくる。しかし，情意面から児童の学力に関わって変容を見ていくときに，このように一定の項目をもうけ，それについてデーターを集積したなかで，ある程度の傾向がつかめてくると考える。
他に，学年の実態や児童の変容を知る上で必要だと思われる項目は，その学年で付け加える。また，記述する内容について児童に視点を与えたり，書く回数を減したりすることも各学年で工夫する。
⑤毎時間，教師がコメントを入れることを基本としているが，本校では，コメントでなくても下線や◎を記入したり，児童が記述したときに言葉を掛けたりしてすぐ対応することに重点を置く。

（２）１学期の取り組み内容
１年生は，ひき算の各小単元終了後に３回行った。一年生では，自己を客観的にふり返ることがまだ難しいので，基本となる項目についてフェイスマークに色を塗らせることで，児童の理解度や意識を見た。
２年生では，フェイスマークに色を塗るだけでなく，吹き出しをつけて，自由

に記述できるようにした。そのことから，ただ「わかった」という結果だけでなく，なぜ分かったのかという理由を知ることができた。
　３年生以上になると，児童が興味を持って記述できるように視点を与えることも考えられる。毎時間，同じ内容の項目に付いてだけ学習感想を書くのではマンネリ化しやすい。そこで，教師が学習をふり返る新しい観点を児童に示すことで新鮮な目でふり返ることができたり，客観的なふり返りになると考えた。
　６年生は，とにかく毎時間授業日記のような形でノートに書かせた。だんだんと習慣化して，自分の目で学習をふり返ることができるようになっている。

（３）２学期の取り組み
　１学期に引き続いて，学習感想を生かした指導を試みた。児童の自己評価としてだけでなく，教師が指導を振り返ることで児童に学習内容がより深く，確実に理解できることにも努めた。それらの実践の中から

１学年

単　元	児童の学習感想から	児童の学習感想を受けて工夫した点
ひき算	（「わからない」のフェイスマークが塗ってあった）	筆算の方法を用いて，横式の計算に移行する内容が理解できない児童がいたので，筆算との共通性を説明してもう一度指導した。

３学年

単　元	児童の学習感想から	児童の学習感想を受けて工夫した点
あまりのあるわり算	ゲームのわり算は簡単だったけど，今日のわり算はむずかしかった。	ゲームと結びつけたり，具体物を取り入れたりしながら，わり算の計算方法を理解させるようにした。
たし算とひき算のひっ算	今まではたし算で，今日はひき算だったから，頭がぐちゃぐちゃになった。 久しぶりにひき算をしたのでむずかしかった。	たし算とひき算の計算方法を比べ，その違いをはっきりさせた。 ひき算を難しいと書いていた児童については，計算練習時に個別にそのでき具合をチェックし，励ましの言葉をかけた。

６学年

単　元	児童の学習感想から	児童の学習感想を受けて工夫した点
分数のたし算	通分のところが分からなくなっちゃったのでもう１回教えてください。	次の時間のはじめに,復習を行った。
分数のわり算	難しくて，よく分かりませんでした。	休み時間に個別指導を行った。 次の時間のはじめに，似たようなつまずきが他の児童にも見られなかったかどうか確認し，念のため復習をした。
比例	班の話し合いでたくさんのきまりが見つけられて楽しかった。	班ごとの話し合いの機会を増やしたり，クイズ形式で問題を解けるような教材に工夫している。

４．成果

・学習感想による自己評価は，１年生の段階でもある程度有効であることが分かった。他の学年の児童も学習感想を書くことで自分の学習を振り返ることができ，「今度はこんなふうに勉強しよう」といった次時への意欲につなげることができた。
・自分をふり返り，自分の言葉で文に表すことで，その授業で自分にとってわかったこと，わからなかったことが明確にできるようになった。また，わからなかったことを，自分で確認できるので，課題意識が生まれ，次時のめあてを持てるようになった。
・学習感想にわからなかったことを書くとそのことを何とかしてもらえるという安心感が出て，学習に対する意欲も増してきた。また，教師自身にとっては，授業内容・指導方法を振り返る資料となった。
・遊びやゲームなどの体験的操作を中心にした学習，基礎的・基本的な内容を基にした学習，より進んだ内容などの発展的な学習など，スタイル別の指導計画や指導方法を工夫することで，学ぶ喜びや楽しさを実感できた。
・コース選択学習後のアンケートからも学習内容のわかりやすさ，楽しさを感じることのできる授業形態であったことが児童の感想からうかがえる。
・昨年度からコース選択学習に取り組んでいるので,保護者の理解もより深まり,この学習形態に期待を寄せている。

・文章を声に出して読むことは，学習活動の基本である。声に出すことで学習を意識することができ，よく分かっているのかいないのかも確かめることができた。国語の音読は　勿論，どの教科においても，問題文を読んだり，まとめや板書を読んだりなど，この活動をできるだけ多く取り入れてきた。
児童は「読み」への抵抗がなくなり，自分から学習しようとする態度を養いつつある。
・「基礎基本に力を入れた学習指導で子どもの伸びが見えてきた。有り難い」という保護者からの意見も寄せられたり，家庭でも漢字や計算等の取り組みを始めたりしている。
・保護者が子どもの学習に対して関心を持つようになった。家庭でも「百マス計算」の話題が出たり，家庭学習を励ましたりしている様子が保護者の話からわかった。音読カードを使い家庭と連携を取りながら「音読」に取り組んだ結果，言葉のまとまりや文のまとまりを意識して読むことができるようになってきた。
・復習や学習のまとめに自分のノートを使ってできるようになったことでわからない問題に対して，自分のノートを見ることで，問題の解決をはかれるようになった。
・始めのうちは，個人差が大きく１００マス計算を終えるのに１５分近くかかっていた児童もいたが，コース別学習での指導を進める中で徐々に時間を短縮できるようになった。タイムや得点など結果が目に見えるため，児童は意欲的に取り組んでいる。また学習内容に関わる１００マス計算を導入することで，習熟面での効果もでてきた。
・「音読」「百マス計算」「朝学習」など継続的に取り組んだ結果，自分から進んで学習する姿が見られるようになった。

２．今後の課題

・「学習感想」をどのように指導に生かしていくか，さらに検討をしていく必要がある。児童自身に自らの変容等が分かるようにすることを目標とし，どんな観点で授業を振り返ることができるか，どういう観点で振り返ることが児童のメタ認知を育てることになるのか，という点を明確にしていきたい。
　しかし，授業時間内に書くということがむずかしく，児童が記述した学習感想を教師側がコメントする時間の確保も困難であり，授業中にノートを見てその場でコメントするなど工夫の必要を感じた。
・「コース選択学習」では，個に応じた指導をすることによりほとんどの児童が目標をおおむね達成することができたが，グループ編成や学習環境などの課題が残り，さらに有効な指導法を研究していく必要がある。
・コース別の学習を単元のどこで取り入れたらより効果的な指導ができるのか，これからも検討していきたい。
・指導方法を共通理解したり，子どもへの関わり方を事前に打ち合わせたりする時間が確保できなかいこともあったので，教師同士の連携を深め，より有効なＴ．Ｔ．学習を工夫していく必要を感じた。
・基本的な力を育てるために取り組んできた百マス計算等を継続したり学習した内容をきちんと定着できる手立てを工夫したりする方法を検討したい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

教研式（CRT)学力テストの実施（年１回，２月）
第１～５学年：国語　算数
第６学年　　：国語　算数　社会　理科

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・平成１５年度　　公開授業（中間報告）　　平成１５年１０月２７日実施
・平成１６年度　　公開授業　　平成１６年１０月２９日実施予定
・ＨＰ作成中
（http://www.amari.comlink.ne.jp）

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
☑２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☑算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無